

医療現場が求める臨床検査技師像

◎深澤 恵治¹⁾

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 専務理事¹⁾

少子高齢化が進展する中、厚生労働省においては高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を推進している。一方、地域医療構想では急性期病床の削減と共に慢性期病床の介護施設、在宅医療等への転換が示されている。そのような中、医療を取り巻く環境の変化によりチーム医療の必要性が明確化され、臨床検査技師もチーム医療への参画が不可欠となった。これまでも臨床検査技師は糖尿病チーム、NST、ICT等において、積極的に関与してきたが、より質の高いチーム医療を提供するために、各医療職種が、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供することが求められる。臨床検査技師がチーム医療の中で検査前工程から検査後工程までの一連の流れにおいて検査の専門家として職責を果たすためには、様々な医療現場において患者に寄り添い、検査業務を行うことが必要であると考えられる。日本臨床衛生検査技師会（以降日臨技）としても、働き方改革の中でタスク・シフト/シェアの必要性の中で、検査説明相談のできる臨床検査技師の育成や、病棟業務への参画、認知症対応能力の向上に加え在宅医療への参画も推進している。また、最近の医療の話題は人工知能（AI）による私たち医療現場の効果（影響）がメディアや多くの雑誌で取り上げられている。現在の話題は医療資源（ビッグデータ）をいかに診断支援に結びつけるかが主流ではあるが、今後は様々な医療業種へAIの技術を応用した革新的なシステムが実際の医療現場に導入されることが想定される。その時に私たちはAIを管理・使用する立場にいるべきではないかと考えている。そのために必要となるのは患者に直接的な医療を提供し、臨床検査データに基づき他のメディカルスタッフと協働することが必要である。もちろん患者の居宅において臨床検査技師が実施する臨床検査は、患者だけでなく家族も存在する状況下での実施となり、医療者だけでなく家族などとも連携の取れるようなコミュニケーション能力を養う必要がある。

今回は、これからの10年後、20年後の臨床検査技師像について参加者一同でディスカッションし、私たちの未来に繋げられるシンポジウムになることを期待している。

本校の特徴と私が目指す臨床検査技師像

◎井出本 悠生¹⁾

倉敷芸術科学大学 生命科学部 生命医科学科¹⁾

私が4年生となって思う本校の大きな特徴は、1. ダブル・ライセンスの取得：全国でも数少ない、在学中に検査のプロである臨床検査技師とがん細胞判別のプロである細胞検査士の資格取得が可能。2. 教員の充実：臨床検査技師有資格8名の教員のうち6名は、20年以上病院勤務経験と上位資格〔細胞検査士、国際細胞検査士、一級臨床検査士（臨床化学）、認定臨床微生物検査技師、骨髄検査技師、超音波検査士など〕を有し、各分野のリーダー的存在である経験豊かな教員が在籍。3. 学内実習の充実：学生一人一人が自ら手を動かし、試薬などは自家調製するため、思考力、計算力、行動力、問題解決力など総合的な検査基礎力の修得が可能。4. 環境の充実：24時間使用できる自学自習部屋の設置および学生生活、勉強、就職、国家試験など幅広い質問や相談事に対応してくれる教員の存在。の4点です。中でも、4年次の就活においては、ゼミ教員が履歴書の書き方・添削、面接の練習などを親身になって指導して下さった事で、見事第一志望であった病院から内定を頂きました。

私が本校に入学した理由は、本校のオープンキャンパスに参加した時に、設備が充実し、先生方が親しみやすく情熱的で面白く、この学校なら楽しく勉強でき、臨床検査技師の資格を取得できると思ったからです。学内の講義・実習および臨地実習を終えて、臨床検査技師の医療における役割と責任を改めて学ぶことができました。4年次では、超音波技術者育成ゼミで、心電図検定3級を取得するとともに、超音波検査の手技を習得するために、日々トレーニングをしています。就職後は迅速で正確な検査を行うとともに、検査値から判読できる有用な情報を医師に届け、患者とのコミュニケーションを大切に、患者に寄り添い、信頼される臨床検査技師を目指します。

私が目指す臨床検査技師の未来

◎竹本 真夢香¹⁾

山陽女子短期大学 臨床検査学科¹⁾

臨床検査技師といえばどのようなイメージが浮かぶだろうか。一般的には病院で検査をしてその検査結果から医師が病気を診断するというイメージが思い浮かぶのではないだろうか。病院での臨床検査の目的は病気を診断したり、治療方針を決定したり、薬の効果を判断することである。しかし、病院で検査を行う多くの場合、患者は何かしらの自覚症状があり、受診時にはすでに病状が進んでいる場合もある。診断されたとしても、予後不良の場合もあり、それは残念なことであると思う。

私は今後臨床検査技師として、健診センターで予防医療や病気の早期発見に携わっていきたい。健診センターでは健康診査（以下健診）や人間ドックを行っており、基本自覚症状のない人が受けるため、早期発見に携わることができる。また、検査結果から運動や食事の改善方法のアドバイスをする健診センターも多くあり、臨床検査技師の出す検査データが運動や食事の改善を行う重要な情報となり得る。少子高齢化が問題となっている現代では、予防医療で健康寿命を伸ばすことで増加し続ける医療費の問題も少しずつ解消できるかもしれない。このように健診センターでは明るい未来に向かう手伝いができるのではないかと思う。

特に健診や人間ドックを受ける人が少ないという30代や40代の若い世代には、その重要性を広める啓発活動を行いたい。例えば家族ぐるみで参加できるようなイベントを開催したらどうだろう。健診や人間ドックの重要性を学べるようなゲームで子供と一緒にその重要性を知ってもらえば、親世代の方も健診や人間ドックを受けてみようと思うかもしれない。今後就職してからそのようなイベントを提案し、実行してみたい。

私は将来臨床検査技師として検査をするだけでなく啓発活動に積極的に取り組み、一人でも多くの方がQOLを上げて健康寿命を延長できるように早期発見や予防医療に関わっていきたい。

臨床検査技師の未来

◎野口 直穂¹⁾

広島国際大学 保健医療学部 医療技術学科 臨床検査学専攻 4年¹⁾

【はじめに】

広島国際大学は1998年(平成10年)に開学し、増設や改組を重ね、2011年に保健医療学部臨床工学科臨床検査学専攻、2013年に保健医療学部医療技術学科臨床検査学専攻として改組された。

本校では、4年生制度を活かし、1年次と2年次では臨床検査の基礎を学び、病院や検査センターなどの医療関連施設への見学を行う。3年次には国家試験対策として特別講義が行われ、4年次には病院実習、または国試合格を目指して模擬試験などが行われている。

【専門職連携教育(Interprofessional Education:IPE)】

IPEでは、健康・医療・福祉に関わる各分野の専門職の仕事を理解し、信頼に基づいて連携する大切さを学び、より良い医療・福祉サービスの提供を目指す。これは医療系総合大学ならではの取り組みである。専門職としての能力(それぞれの専門性)以外に、基本的なコミュニケーション能力と、専門性や個性が異なる相手に有効にアプローチする能力、さらにケース検討会議など円滑に進める能力や連携のリーダーシップをとる能力などの人材育成が行われている。

【目指す臨床検査技師像】

医療従事者として知識や技術を身につけていくことも大切ではあるが、病院実習を経験して、現場の臨床検査技師の方に教えて頂いた中で最も心に残ったこととして、業務に取り組む中で検体から得たデータだけを見てしまいがちではあるが、そのデータを得るための検体には、採血をされた患者さんがいて、さらにはその方のご家族がいる。もしも、その方が自分自身の家族であれば少しでも早く検査結果を知り治療をしなければならないのであれば治療して欲しいと考える。その気持ちを忘れることなく業務に取り組む1つ1つの検体を疎かにすることなく真摯に仕事に取り組みたい。

また、今後の医療の現場においてはAIが普及していき様変わりしていくことが予想され、そこで懸念されるのは臨床検査技師の必要性である。AIを臨床検査技師の職を奪う存在として捉えるのではなく共に医療を支えていく存在として捉えなければならない。実際の現場ではコミュニケーションが必要となってくるのでAIを活用できる人材となり他職種に信頼される臨床検査技師になりたい。

臨床検査技師の未来

私の夢

◎山崎 翔太¹⁾

高知学園短期大学 専攻科応用生命科学専攻¹⁾

私は現在、高知学園短期大学の専攻科応用生命科学専攻に所属している。3年制の短期大学課程を卒業し、臨床検査技師免許を取得した上で、さらに学びを深めたいと考え進学した。私が臨床検査技師を目指すきっかけとなったのは、地元の病院で受けた血液検査である。臨床検査に興味を持ち、業務内容について調べていく中で、正確な検査データを提供するこの職種は社会にとって必要不可欠な存在であると認識した。臨床検査技師となり、検査から疾患の早期発見や早期治療に貢献したいと考え、高知学園短期大学医療衛生学科への入学を決めた。

専攻科の授業は、症例として提示された検査データから病態を推察し発表する病態解析学特論や、指導教員の下で研究テーマを決め、1年間を通じて実験・発表・論文作成を行っていく修了研究などがある。コミュニケーション能力を高め、プレゼンテーション力を身に付け、かつ問題解決能力を養うことが、本学専攻科応用生命科学専攻の特徴である。修了後には「保健衛生学士」を取得できる。

私は、高知県総合保健協会に就職が内定している。高知県は中山間地域が多く、高齢化・過疎化に加え、特定健診の受診率が低く、壮年期世代の死亡率が高くなっている。健診センターは、高知県内の遠隔地・過疎地を問わず全域をカバーした各種健康診断・がん検診を行っている。広範囲の健診事業に従事することで各地域の方々と関わり、予防医学の面から地域医療に貢献し、人間としても成長したいと考えている。私の夢は、「高知県の健康大使」となり受診率を高め、年齢層を問わず、高知県全体を明るく元気にするのである。

本学は2020年に大学化し、4年制の臨床検査学科、管理栄養学科が設立された。文部科学大臣指定校であり、高知県臨床検査技師会とも連携した教育を行っている。高知学園大学は、高知県の掲げる「日本一の健康長寿県構想」に貢献する人材を輩出することを目指している。

私の思い描く臨床検査技師像

～先輩技師の立場から～

◎樹 昇吾¹⁾

広島赤十字原爆病院 検査部¹⁾

私の思い描く臨床検査技師像とはなんなのか、就職する前と現在の考えを比較してみた。

学生時代、臨床検査技師とはただ検査を行い診療へ報告する架け橋的な役割を担うものだと抽象的な考えしかなかった。私は大学卒業後、広島赤十字・原爆病院の検査部に就職し3年の月日経った。検査部の中で私は生化学免疫血清検査をはじめ、採血業務、新生児のABR、当直業務に携わっている。今回はその業務を経験していく中で2つの気づきがあったため、その気づきについて話したいと思う。1点目は「臨機応変な対応力」、2点目は「報・連・相」である。まず1点目の「臨機応変な対応力」について気づいたのは採血業務である。採血をしていると生化学の採血管には十分な量が採れているにも関わらず溶血している検体があることを知った。溶血の原因は様々であるが、採血時に何らかの対応をすることで溶血を防ぐことができる。そこで当採血室ではモニター上に溶血しやすい患者にはコメントがでるようになってきている。このコメントのおかげでゆっくり採血・分注することや溶血の影響が少ない採血管に変更するなど臨機応変に対応することで溶血を防ぐことができている。2点目の「報・連・相」は結果報告について気づいた事である。臨床検査の中でも生化学免疫血清検査はオートメーション化が進んでおり、多くの検体が迅速に測定されている。そのため、私もボタン1つで事が済むといったイメージを持っていたが、業務をしていく中で輸液の混入や患者間違いといった検査をする前の問題があることを知った。これらのことから、測定している結果が臨床とあっているのかどうかという事に気づけるかが臨床検査技師の力量だと考える。この力量がいかにか発揮できるかは、他部署との連携や、上司や周りとの「報・連・相」が重要となる。1人より2人、2人より3人といった多くの知識と情報によって正しい結果を出すことができると考える。

臨床検査技師は、検体検査・生体検査など幅広い分野に分かれている。そのため、それぞれの経験、知識を「報・連・相」というツールで繋いでいくことで、より付加価値のある報告につなげられると考える。さらには多職種ともかかわっていく必要もあると考える。自分の思い描く臨床検査技師とは何か私は常に追求し続けていきたいと思う。